

## 社會學の一元論的方針とモナド論的方針（承前）

（デュルケムの社會學方針に關する一考察）

淡 德 三 郎

### 一、デュルケムの社會學研究方針によつて

#### 暗示される近代社會學の歸趨

先に述べしが如くデュルケムによれば、社會事實は唯先行する社會事實によつてのみ説明せらるべし、詳しく言へば社會事實は先行する集團意識を基礎とし、物質要素、社會の容積と動的密度の中に起る變化によつて必然的に決定せられ、個人の意識は唯此の社會的必然を反影するに過ぎぬ。個人は決して社會的變動の過程に新しい要素を導き入れるものではない。それは社會的因素によつて決定せられ變化せしめられる不定なる材料に過ぎない。かくの如く社會學の任務を、一切の社會事實を個人意識を超越した社會的環境によつて説明するに限局し、個人意識が社會事

實に及ぼす作用の方面を研究の領域外におく方針を、こゝに假りに一元論的説明方針と命名し、後に述ぶるモナド論的説明方針に對立させる。

かくの如き方針の最も類型的なものを我々はデュルケムの外に、グンプロウイツの社會觀やマルクス派社會學に見出す事が出来る。例へばグンプロウイツの如き句は彼、がデュルケムと同様に、否寧ろ一層徹底的に一元論的説明方針をとつた事を證明してゐる。即ち曰く『相反對する要素の軋轢と鬭争、分離と結合より、遂に新しき順應の産物として、より高き社會的心理的現象、より高き文化形體新しき文明、新しき國家及び國民統一が生まれる。……しかもこれは唯社會的作用及び反作用によつて、個人の創意及び意志とは全く獨立に、その觀念、願望及び社會的努力に反して行はれるのである。』(Gumplovicz, *Soziologie und Politik*, p. 94) 又唯物史觀の公式として有名なマルクスの次の一節の如きも、明に此の方針に立つてゐる。『人類は彼等の社會的生産に於て、一定の、必然的の、彼等の意志より獨立したる關係に、即ち彼等の物質的生産方の一定の發展階級に適應する所の生産關係に入り込むものである。これらの生産關係の總和は社會の經濟的構造——法制上及び政治上の上層構造が依て以て立つ所の、又一定の社會的の意識形態が之に適應する所の眞實の基礎——

をなすものである。物質的生活の生産方法は一般に社會的政治的及び精神的の生活過程を條件づける。人類の意識がその存在を決定するに非ずして寧ろ之に反し彼等の社會的存在がその意識を決定するのである。』(K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Herausgegeben von K. Kautsky p. LV)又ラブリオラは言ふ『社會は複合的な全體即ち有機體である。……與へられたるものは社會生活の統一的全體である。經濟それ自身が歴史的過程の中に分解して種々なる形態學的段階として現れ、その各々の段階に於てそれがすべての他のものゝ地盤となる。……つまり我々のせんとする所は經濟的なものを歴史的に考へてその變遷によつて他の變遷を説明する事にある。』(Labriola, Essais sur la conception matérialiste de l'histoire. 1897, pp. 95—96, and pp. 107—108)これは正しくデュルケムが思考の範疇宗教的概念、道德的内容の變遷等を社會の密度と容積のそれによつて説明せんとする態度と根本的精神に於て一致してゐる。(註)

(註) かくの如き見方は結局人間の意志を否定する一種の宿命論となるを評する論者がある。例へば佛のリシャール (Richard, Socialisme et Science Sociale, p. 42—43) 獨のシユタムラー等がそうである。シユタムラーは唯物史觀に就いて次の如く論じてゐる。マルキシストは社會主義の實現は日蝕の開始と同様に不可避的であると考へる、しかも何故に彼等は之を實現する爲に運動してゐるのであるか。若し社會主義が日蝕や月蝕の様に必然的のものならば、勞働階級の政黨を作る爲のすべての努力闘争は無用である。月蝕を促す爲に團結を作る必要はない。(Buchanin, Theorie des historischen Materialismus, Hamburg, 1922,

117, 46—47)

之に對してフーリンは左の如く答へてゐる。シュタムラーの誤謬は社會現象といふものが社會を構成する人間の意志を通じてのみ生起しうるものであるといふ事を考へる時、容易に見出される。人間なき社會現象といふは圓い四角といふと同じく矛盾である。されば社會的決定論、即ちすべての社會現象には原因がある、それよりすべての現象が必然的に起るといふのは決して或る人々が解する様に宿命論ではない。宿命論は人間の意志が社會進化の因素たる事を否定する。然し決定論はかかる事は少しも考へてゐらない。(Bacharin, *Ibid.*, p. 47)

デュルケムも亦左の如く述べてゐる。<sup>1)</sup>社會の機械的概念は理想を排斥せず、されば之を以て人間をその歴史の單なる傍觀者に過ぎずと見做すといふ批難は當らない。要するに理想とは望ましき結果に關する豫想的表象に外ならないのではないか、そしてその實現は此の豫想によつてのみ可能である。すべてが法則に隨つて行はれるといふ事から、吾人のなすべき事は何事もなしといふ結論は出てこない……(但し)如何なる場合に於てもそれは社會の力を無制限に高めるべきものたる事は出来ない。唯社會的環境の一定の状態によつて指示されたる限界内に於てのみ之を發展させる事をうるのみである。』(Durkheim, *De la Division du Travail Social*, pp. 331—332)

社會事實を特に社會が個人を支配し、或は規定し、或は制約する方面より見て行くを以て社會學の職分と考へる此の一元論的方針に對して、モナド論的方針と稱せられるものは社會事實を個人の相互關係若しくは相互作用の方面より理解せんとするものである。タールド、ジンメル及び現代社會學者の説は此の方針に立つてゐる。今私はタールドの論ずる所によつて此の方針の趣旨を述べる事とする。(Tarde, *Les*

*lois de l'imitation*, 2<sup>e</sup> édition, Paris. Alcan, 1895. *La logique sociale*, 2<sup>e</sup> édition, Paris Alcan, 1897, *Les*

lois sociales, Paris Alcan, 1898)

彼によれば特に社會的なりと言はれうる現象は模倣である。その諸法則によつてのみ集團的現象の大部分が説明される。人々が集まれば必ず互に模倣しあふ、そしてそれによつて互に他に感化を及ぼしてゆく。社會とは集合せる個人が互に模倣しあふ結果生じた類似をさすに過ぎない。そこに何等特異なる實在があるわけではない。

模倣は社會的には二つの重要な形式の下に現れる。慣習の形式と流行の形式がそれである。慣習模倣と流行模倣とによつて社會的類似のすべてが悉く説明せられる。唯直接に生理的原因をもつものや、如何なる社會にあつても全く同一の反應を起させる様な外部的條件によつて説明されるものだけは例外である。これらは嚴密なる意味で社會現象といふ事は出来ないのである。

然し模倣はその半面として同様に重要な一現象を伴つてゐる。それは即ち發明である。新しい事情によつて促された個々の問題に對して人々は創始的な特異な反作用によつて應ずる事が出来る。而して最初嚴密に個人的なりしすべての發明は次いで模倣によつて傳播される事となり、模倣される限りに於てそれは社會現

象となるのである。發明は一般にそれ迄模倣的であつた二つ又はそれ以上の傾向の言はゞ會合點若しくは衝突點に生まれる。これらの傾向を合致させ調和させんとするものが發明である。かくて互に對立的な二現象たる發明と模倣隨つて之に應ずる心理學と社會學とは互に交錯し、互に他を補充する。

要するに社會學にあつては『要素の中にその複合物の全説明全存在が藏せられてゐる』(Tarde, *La sociologie élémentaire l'annuaire de l'Institut Internationale de sociologie*, Paris, 1895, p. 223) と見るのがタールドの根本的態度であつて、同時に又モナド論的方針の根本原理である。

又ギッディングス氏は社會學を説明して『社會學とは社會の科學的研究である。

それは社會の完全に科學的な記述及び歴史たらん事を目的とする、即ち一層單純なる現象の言葉による社會の出来るだけ完全なる説明たらん事を目的とする。』(Giddings, *Inductive Sociology*, p. 7) と言ひ、その探究の單位を論じて『その最も單純なる形式に於いて、凡そ個人が僚友又は伴侶をもつ場合には、そこに社會が成立する。されば社會人が一切の社會團體若しくは社會の單位であり、その活動が社會活動の單位である。』(ibid, p. 9) かくて社會學は『社會人の性質、その習慣及び活動を研究する。社會人

の諸種類、彼等の相互的感化やその結合分離の様式、彼等が形成する團體の性質——すべてこれらの問題は又社會學の問題である』(ibid, p. 10) 即ち彼も亦社會現象を個人意識の方面より闡明してゆかうとする方針に立つ。

けれども私の考ふる所によれば、此の二つの方針は共に社會學的研究の正當なる領域に入るものであつて、社會學の任務をその何れかに限るのは穩當ではない。今一元的説明方針は把捉するに困難な流動する内的方面の現象を、客觀的な外部的方面の研究によつて取りかへようとする試みとして、單に研究上の一の手續きたる限りに於て何等批難すべき點はないと思はれる。けれどもそれが爲に我々は現象の一層内實の活動を看過し無視してはならぬ。確に現象の外部的方面は把捉し易く、又その研究はなし易い。これ一般に初期の社會學者の注意が専ら此の方面に注がれた所以である。けれども社會學の仕事が單に之にのみとゞまるならば、その與へる知識は極めて淺薄なる事を免れない。此の點をロツス氏は指摘していふ『解剖學が胎生學よりも先に發達した様に、集團的思考並びに活動の堆積物の存在は、之を發生せしめた化學的過程より遙か以前に認知された、デュルケム教授の例はよく此の

點を例示する。彼は個人の周圍の社會形態網が個人に及ぼす強制を強く感じる、しかし正しくこれらの形態が如何にして生起したかを説明する仕事の前には全く無力である』(Ross, *Foundations of Sociology*, 1905, New-York, p. 92)而して一元論方針が看過し若しくは無視した此の方面を主として研究するものがモナド論的方針である。(註)

(註) 社會學の研究方法に於ける此の二方針の對立は社會現象に於ける天才若しくは選良の意義に關する兩者の見地の對立に於ても亦著しく現れてゐる。テュルケムによれば天才は社會表象を受容すべき比較的高等なる鑄型に過ぎない。彼は普通の、又は劣等なるものよりや、優れたる腦髓をもつてゐるだけであつて、その精神内容は彼の社會團體に於ける低級なるものと同じく全く團體の社會心より由來したものである。彼がもつてゐる様に見える優越は、實際は唯彼が生存してゐる社會によつて彼に與へられたるに過ぎない。されば天才なるものは決して社會の創始的因縁ではありえないのである。(Gellie, *Emile Durkheim's Contributions to the sociological theory*, New York, 1915, p. 99. による) グンプロウイツツも亦『歴史の英雄は團體意志を運搬する操人形に外ならない』と言つてゐる。此の態度は又マルキントであるブレハノフが歴史に於ける偉人の意義を論じ『彼は一個の英雄である。それは彼が事件の必然的且つ無意識的進行の、意識的なる且つ自由なる表現であるといふ意味に於て、その點に彼の重要さは存し、その點に彼の力が存する』(河上博士『社會問題研究』第十一冊二十二頁による) といへる思想と一致する。

之に反して、タールドにありては天才の偶然の發明又は發見は歴史の進行上極めて重要な意義をもつものであつて、彼は單なる歴史の必然の道具ではない。各瞬間に於て社會には多くの通路が開かれてゐる、その何れに従ふかは全く天才の發見又は發明に依存する。『アメリカは想像力に豊富な航海者によつて或はもう二世紀早く達しえられたかも知れないし、或はもう二世紀遅く達し得られたかも知れない……。今第一の假設にあつては或は百年戦争は避けられたかも知れず、又第二の假設にあつては或はシャルル・キントの大帝國は實現されなかつたかもしれぬ、それは唯神のみが知る所である。』(Tard, *Les lois de l'imitation*,



pp. 22—23)

此の二種の天才論の對立も、その夫々がよつて來る所の一元論的方針とモナド論的方針のその如く、夫々事實の半面を語るものであると解するに於て、兩者は共に正當なる見解であるといはねばならぬ。吾人若し生きたありのまゝの事實、動きつゝある如實なる社會的實在に向ふならば、個々の社會的事件の中に常に左の二つの要素を見出すであらう。一は個人の意志や表象と獨立した一定の外部的社會狀態であり、他は此の社會狀態の反影であり鑄型であり乍ら、同時に之に對して働きかける個人の努力である。社會と個人との關係を正しく理解せん爲には此の二つの要素を共に考察しなければならぬ。此の事は個人の成長の過程を觀察する事によつても亦理解される。個人の形式は區別すべき二つの時期からなる。その形式の初期に當つては彼は常に寧ろ受動的であつて、両親とか教師とかその他の環境を媒介として一定の社會的構成物を傳へられる。然るに一旦かくして個々の個人的鑄型の中に社會の姿が反影すると、個人は大なり小なりの創意を以てその上に働きかける、(全然創意力を失つた個人もぬるが)そしてそれが新しい社會狀態を生起せしめる爲の一の因素となるのである。今一元論的方針がモナド論的方針に於て最もすれば無視される社會の個人に對する能動的作用を明示すると共に、他方一元論的方針に於ては取扱はれてをらない個人の創始的活動の方面をモナド論的方針が指摘する限り、此の二種の天才論は、何れが是、何れが非といはるべき性質のものでなく、これは共に生きた事實を我々に傳へるものである。(尤も社會的變動の原因にはロツス氏が名づけて量的原因と稱せしものがある。例へば資源又は資本の増減人口成分の増減等がにれである。それは全く個人の意志とは獨立に一定の社會過程の副産物として生起し、その量的累積の結果はやがて質的變化をよび起し、遂に社會的構造に迄變革を及ぼすに至る。例へば羅馬に於ける中産階級の滅亡、中世紀の封建制度の確立、教會權力の増大、近世資本主義經濟の成立、資本の累積等はその例である。すべてかくの如き事實の生起に當つては個人が如何に意志するか企圖するかは問題でない。ロツスは社會變動の此の過程を靜的動的過程とよんだ。(Koss, op. cit., pp. 197 204) しかし今は此の問題には之れ以上觸れないでおく)

左の如き見地から吾人は社會學上天才の意義を定義して左の如く決定したいと思ふ。社會學上に於て天才とは必しもそのなせる業績の眞の價值と關係しない。ドラギチエスコは天才を定義して「すべて威光と權威との標識を以て特徴づけられてゐる者」と

なした。(Draghicescu, Du rôle de l'individu dans le déterminisme social, Paris, Alcan, p. 276) 即ち言ひ換へれば時代の大衆がその主張に權威を認め、その感化になびく時、かくの如き個人は天才と稱される如何に偉大なる、又卓越せる發明又は發見をなさうとも、時代に影響を與へざる者は社會學上天才とみなす事は出来ない。かくの如く定義する事によつてその社會性と個人性とは同時に認められよう。

要するに一定の社會環境若しくは社會的構成物はその社會に屬する個人に對して一の課題として課せられる。しかし課題として課せられる爲には、先づ一定の社會的構成物は個人の精神内容の中に全く受動的に受け容れられねばならぬ。此の個人的活動の受動的方面と能動的方面と共に注意する事によつて始めて不斷に動きつゝある現實の社會の正當なる理解が得られるのである。

唯物史觀の教へる所によれば階級闘争は歴史變動の原動力である。而して階級闘争そのものは生産力の發展と生産關係との矛盾から突然に促される。これは確に先に指摘した靜的動的過程の見地より正常に主張されうる所である。けれども生産力と生産階級との矛盾が如何にして階級闘争、後つて被抑壓階級運動の過程に迄導かれるかを考へる時、そこになほ吾人は個人の創始的意義を見出す事が出来る。ペーベルがその婦人論に於て言ひしが如く被抑壓階級が解放される爲には『何人かが之を覺まし、之に勇氣を興へる事が必要だ。何故ならば彼等は獨立と創意能力を失つてゐるからだ』(A. Jabel, Die Frau, p. 79) 此の意味に於ける天才の出現は、實に階級闘争を現實的ならしめる上に於て、而して又それが眞に歴史變動の原動力たり得る爲に、極めて重要な意義をもつのである。此關係を極めて巧みなる比喻を以てロツス氏は次の如く言ひ表した。『事實は次の如し、新觀念又は新理想の公布は恰も原料の中に一片の酵母を投ずるが如きものである。心理學者はそれが作用する媒介物の性質よりも、特に酵母に注意する。反之經濟學者は何が故にその媒介物が醱酵を生起せしめるかを探究し、酵母を投入する必要を無視する。然し乍ら兩者は共に必要である、原因の問題は結局原料が酵母を待つか、又は酵母がその原料を待つかといふ點に旋回する。』(Ross, op. cit., p. 192)

之を要するに、固定した外部的な社會的構成物の方面より社會事實を理解してゆかうとする一元論的説明方針は、確に社會學的研究の重要な方面であるが、それと共に個人意識と個人意識との相互作用の方面よりの社會事實の解明としてのモノド論的説明方針が重要視されるに於て、始めて社會學研究の全領域が全うされるのである。兩者は決して矛盾するものでなく相補充するものである。

デュルケム自身社會現象に多數の個體が結合して一の新状態を生起せしめる過程の方面と、その新状態が個人心に及ぼす作用の方面との兩方面を區別した事のある事は、先に指摘しておいたが、哲學研究第百十一號三〇—三一頁、注意すべきは彼が社會現象の決定的原因なりと稱してゐる動的密度なるものは、要するに一定の人々の間に行はれる一種微妙なる精神物理的相互作用並びに心理的相互作用に外ならないといふ事である。此の事は彼が此の動的密度の尺度として考へた所謂物質的密度の中に、常に土地の面積によつて決定される人口の數のみならず、更に交通運輸の道が數へられてゐる事によつて覺られる。然らば此の相互作用そのもの、過程に就いて理解を得んとする事は必然の學的要求でなければならぬ。

更に此の事は同じくデュルケムの學派に屬してゐたブーグレ氏思想によつて

一層確められる。彼も亦社會を『物』として外部より之を取扱はんとしてゐるが、それと同時に彼は社會過程の心理的理解、即ち社會的結果が如何なる個人間の相互關係より由來するものであるかの研究を放擲しない。つまり彼は集團表象が個人表象と全く無關係であるといふ考を排斥するのである。『社會學が客觀的たらんとする努力は是認しなければならぬ。しかし客觀的といふ名を借つてその研究の領域から重要なる一部類の事實を放擲するのは危険である。此の事實を考へなくとも我々は異なる『外部的』形體の間に共存關係を打ちたてる事は出來よう、しかし乍ら合理的な關係を立てる事は出來なく』(L'Année Sociologique, 3<sup>e</sup> Année, p. 152)その重要な領域とは即ち心理的相互作用に外ならぬ。『我々は生物學的類比より離れて直接に社會の固有の領域である現象に向きあはねばならぬ。その現象はその根柢に於てなほ心理學的現象である、何故ならばそれは個人意識の相互作用に基くのであるから…』(L'Année Soc., 1<sup>re</sup> année, p. 111)かくて彼は大いにジンメルの思想に近き社會の大小、その持續の長短、同質的社會と異質的社會、全體的社會と部分的社會、階級的社會と平等社會、組織ある社會と無組織社會等の社會形式の解明、その結果並びに原因の研究を以て社會學の問題としてゐるが (Bonglé, *Quest-ce que la Sociologie?* 1910) 一

れは正しくデュルケムの社會學の行くべき所を暗示するものと思はれる。パロディ氏がブーグレ氏を批評して『彼はいはゞデュルケムとタールドとの互に反對した方法を結合しようとしてゐる』と言つたのは此の點を指摘したものである。(Parodi, *La Philosophie contemporaine en France*, 2<sup>e</sup> édition, 1920, p. 147)

而してそれは又現代社會學の一般が進みつゝある方向に外ならない。例へば社會過程を中心として社會學を研究してゆかうとするスモール、ロツス、パーク、オツペンハイマー諸氏の態度、ジンメルの流れを汲むフイーアカント、フォン・ウイーゼ等の關係社會學等何れも此の方針に立つてゐる。

スモール氏は社會學を定義して『社會過程の學である』となし(Small, *General Sociology*, 1905, p. 35)或は『社會學は團結によつて互に影響し影響されるものとして考へらるる人間の研究である』(ibid. p. 23)と考へ、此の見地より『すべての社會學が本能的に知らんと努めてゐた知識の領域を鳥瞰せん』(ibid. p. 23)として、結晶固定した構造や機能の研究を専らとするスペンサーやシェツフレの方針にも適當の意義を與へた。

ロツス氏は社會學的研究の單位(ユニット)を關係(例、友人關係、師弟關係等)、團結(グルーピング)(例、群衆、公衆、家族階級、國民組合等)共同意識(例、言語、神話科學等)、規範制度(例、法律、政治、經濟、教會等)

等の五に求めたが、しかしそれらは何れも心理的乃至客觀的生產物プロダクトである。外部より見ればそれは個人の生活を形作り、その一生を支配する神又は運命の様に見えるが、しかしそれは又すべて人間の作用及び相互作用より生起したものである、されば『その發生を理解する爲には、我々は社會過程として知られた原本的事實に遡らねばならぬ』(Ross, op. cit., p. 91)かくて彼は社會學の研究領域の三部門を區別した。

(一) 第一は社會過程の研究である。それは先づ豫備的研究として(イ)同化アツミレシヨの過程を取扱ふ、次にそれはその中心部門として眞の意味の(ロ)社會過程、即ち社會靜學を取扱ふ、社會化、分化、支配、反對、順應等の過程はその一例である。最後にそれは(ハ)改造リコンストラク過程、即ち社會的變動の過程、換言すれば社會動學を研究する。

(二) 社會學的研究の第二の部門は主觀的(或は心理的)生產物、即ち共同意識ユフオーミテイ規範並びに制度の三を取扱ふ。

(三) 終りに社會學は客觀的生產物、即ち關係及び團結を取り扱ふ。(ibid, p. 98)即ちこゝには完全に一元論的方針もモノド論的方針も攝取されてゐる。

又パーク氏がデュルケム等の方針を解釋して『社會の成員を相互的影響の體系の中に結びつけられたるものと考ふる』思想と見做し、(Park and Burgess, Introduction to the

Science of Sociology, 1921, p. 36) 社會學の中心的研究問題は、社會統制及び之を成立せしめる社會過程にあるとなせし時、(ibid., p. 42) それはデュルケムの解釋としては正當だつたとはいへないが、少くとも彼も亦吾人が上に指示した如き方針に立つてゐた事が理解されるのである。

又オツペンハイマー氏は社會學を以て『社會過程の理論』なりと解し、(Oppenheimer, System der Soziologie, B. I.—Allgemeine Soziologie, H. I, Jena, 1922, p. 68) 『社會過程は歴史的にも論理的にも社會に先立つ、それによつて社會は起り、又それによつて社會は起りうる』と言つてゐる。然らば社會過程とは何ぞや、そは一言にして言はゞ人間的集團の活動 *Betätigung menschlicher Massen* といへる。(ibid., p. 79) コレに人間的集團といふは單なる人間の集團 *Masse von Menschen* 即ち人間の集積ではない。それは常に一の全體であり、人と人との間の、或は寧ろ心と心との間の、又は意識と意識との間の關係、然り言語とか文字とか繪畫等によつて傳達される心理的關係の總體である。(ibid., p. 82) 又活動 *Betätigung* といふは、すべての意識的、半意識的、並びに無意識的の行爲 *Handlung* の總體である。且つそれらの行爲は意識的にせよ無意識的にせよ、常に一定の手段によつて、一定の目的に對して、一定の動機から生起する。(ibid., p. 82) かくして社會學は一

方に於てかの集團の中に行はれる心理的機構を研究すると共に、他方集團の活動の目的、手段、原因を研究しなければならぬ。(ibid. p. 83) 即ちオツペンハイマー氏は確に集團の全體的性質を認めてゐた、しかしその全體は無数の相互關係の累積からなる全體であると考へし點に於て、彼の社會學的研究が正しくモナド論的方針に立つのを見るのである。

フォン・ウイーゼ氏も全體の部分に及ぼす作用を否定したのではない、しかし階級國家教會家族等の社會的構成物は、之に導いた所の、又なほ導く所の社會化の諸過程を深く研究する事によつて説明されるものである。然るにそれらの過程は相互關係の無数の集積である。而してそれらの相互關係は主として心理的由來を有するものである。(von Wiese, Zur Methodologie der Beziehungslehre, 米田博士紹介による、經濟論叢、十九卷一號五六頁)かく考へて彼は社會學の任務をそれらの相互關係の究明にありとした。彼の思想上の先輩フイアカント氏の社會學も亦同様である。

(補筆) 私は先に一元論的方針に立つもの、例としてマルクスの唯物史觀をあげたが正確に言へばそれは適當でなかつた。唯物史觀は個人が社會の產物である事を極力強調する、その意味でそれは一元論的であるといへるが、しかもその實際の研究がかく社會の產物である数多の個人が如何にその時代の社會關係殊に生産關係によつて決定されつゝ、互に關係し又その關係を發展させてゆくかに向けられてゐる事より考へれば、それは寧ろ現代社會學が辿りつかうまとしてゐる上來説き來つた如き歸趨を既に指示し



てゐる言はねばならない。唯物史觀は社會をのみ見て個人を忘れてゐるさういふ誤解は多い、そして私も亦その誤解に影響されてゐた事に氣付いたのでこゝに訂正しておく次第である。

こゝに注意すべき事がある。上に述べしが如く一元論的方針は社會が個人を規制する方面より社會事實を理解せんとし、モナド論的方針は個人間の相互關係の方面より之を闡明せんとするを以て社會學の任務と考へる。而し穩當なる社會學方針は此の兩方針を共に認めなければならない事、而してそれは又現代社會學の一般がとりつゝある方針である事を我々は見た。然るに今次の如き疑問が起る、成程社會事實は此の二方面より同時に考察されうる、とはいへモナド論的に之を理解してゆくのは全く心理學の仕事である、社會學が獨立なる科學たらんが爲めには、そこには唯全體の方面より社會を理解してゆく方針が残されてゐるだけである、然らずんば社會學は結局心理學の一部門に歸してしまはねばならないであらうと。されば以上に論述し來れるが如き諸學者の立場の成立しうる根本的豫想として此の問題に關する見解を明瞭ならしめておく事は決定的に重要である。それは或る意味では社會學成立の根本的公理の究明ともなるのである。

此の點に於て社會學上最も重要なる意義と功績とをもつものは、ドゥ・ロベルタイ

のビオンシアル假設である。その説の詳しき論述は高瀬莊太郎氏『集團的經驗に關する一學說』(社會學雜誌第七號)及び米田博士『ビオンシアル假説の意義』(經濟論叢第二十一卷第一號)に於てなされたから、こゝには省くが要するにその根本思想は(經濟論叢二十卷第一號一三二—三三頁)

(一) 超有機的或は社會的現象は、生物と生物との接觸に於て生命の方の特に強まれる自然的結果として行はれる相互作用によりて産出され、生物學的現象に直ちに連續して發現するものである。

(二) その相互作用は本來的には精神物理的相互作用である。されば超有機的現象は其の原始的な形態に於ては、精神物理的相互作用の産物である。随つてそれは本來的には精神物理的性質のものである。

(三) 精神物理的相互作用と生物學的形質との結合によりて、相互的に關係する生物或は人間の心意が段々發達して、高等なる心意作用及び状態が産出される。

(四) 高等なる心意作用及び心意状態が發達する事によりて、人間と人間との間の相互作用は益々心理學的となる。かくて精神物理的相互作用の上に心理的相互作用が行はれてくる。

(五) それによりて超有機的或は社會的現象は益々發達し益々心理學的となると共に、又人間の人格性が益々發達する。

(六) かくて人間の心意は自然に獨立に發達するものでなくて、社會的條件の下に於ける生物學的諸形質の發達として生まれ、又社會的關係の下に益々發達するものである。

右のドゥロベルタイの思想には色々不徹底な點もあるが、要するにビオンシアル假設とは、最狹義の精神物理的現象即ち心理作用の初發状態を伴ふ生理的な生活、或は純生理的有機的生活から心理生活へ踏み出す第一歩として解されたるを(を除いては、所謂心理的事實即ち廣義の精神物理的現象、言ひ換へれば本能及びその他の本有的傾向に關する現象並びに比較的高等なる心理的現象は、純然たる腦髓生理的な事實でも、亦一切の社會現象の説明の最後の鍵となる單純な元素的事實でもなく、それは一つの複合的な事實、ビオンシアル事實である、といふ事を主張するものと解する事が出来る。

しかも彼は心理學的事實を社會學より全く排斥し去らんとするのではない。彼は單純なる相互作用によつて既にその端を發した社會性の影響の下に作られた合

理的な且つ根本的に目的的な能力又は動力の會合によつて、彼がよんで心理學的相互作用と稱する複合的な現象の生起する事を認め、而して此の新しき相互作用が社會文化又は文明に於けるすべての進歩的現象の決定的原因であると考へてゐる。かくて我々は此の假設によつて、社會的事實(即ち彼のいふ超有機的現象)と心理學的事實とは共に最狹義の精神物理的或は生理的事實を基礎として相互的影響の下に同時に相伴うて發生し、相伴うて發達するものである事が覺られるのである。

然らば一體社會學と心理學との區別は何れに存するか、それはドロペルティによれば全く見地の差異に歸するのである。即ち心理學は主として個人意識の内部的關係を究明し、それらの關係を一々分析し、思惟の機構イカニムの内奥の原動力を發見しようとするに對し、社會學者は個人意識の内容を吟味して、その中からその構成要素の一たる心と心との相互作用をとり出し、特に之を研究し、その法則の深奥なる知識を獲得せんとする。

偕て今心理的事實を右の如くに解し、心理學と社會學との區別を右の如くに考へるに於ては、個人意識の相互作用の方面より社會を研究してゆかうとするモナド論的方針が、一切の事實の説明の鍵を個人意識の中に求めようとするものに非る事又

あつてはならない事は明白である。随つて社會學に、右の如く解されたるモナド論的方針を用ふる事は、決して社會學を心理學に還元するものでない事も亦自ら理解されるであらう。而して多くの社會學者が暗々に前提してゐた此の點を既に五十年前に（一八八〇年）明白なる言葉にて論述した點に、ドゥ・ロベルティの假設の意義が存し、功績が存するのである。

要するに我々は、社會學が獨立なる一科たらんが爲には、いふ迄もなく社會の全體の性質個人を超越し、之を支配する力を認めなければならぬが、それと同時に右の全體の中は不斷に動いてゐる社會過程そのもの、研究が社會學の中心部門となるのであつて、しかもそれは決して社會學を以て心理學の一科とするものではない。即ち我々はデュルケムの根本思想を尊重すると共に、その動的密度なる觀念を右の如くに開展するに於て、社會學の正しき問題提出がなされると共に、それが現代社會學の進みつゝある一般的方向であると思はるのである。

終りにデュルケムの社會學的研究の第二の方面、即ち社會現象の機能の研究に關

する規準に就いて一言しておきたい。

社會現象の機能は全體としての社會の目的との關係に於て求めらるべしといふ規準は或る意味に於て正しい。然しそれはすべての現象が何れもかくの如き意味に於ける機能をもつてゐる事を意味しない。社會には明にその社會の存續を破壊する様な機能を有する現象もある。最も手近な例を引いてくれば現代社會に於て溜々としてひろがつてゐる、そして日一日と深刻になつてくる無産階級運動なる社會現象は、抑々現代社會に對して如何なる機能を演せんとするか。それは明に既存的社會秩序の破壊を要求するものであつて、決してデュルケムのいふ様な意味に於ける社會的機能をもつてゐない。此の點に於て實際、デュルケムの見方は、確に社會現象の順應の方面に餘り注意を奪はれ、社會結合若しくは社會連帶破壊の方面を看却した傾向がある。かくて彼は、分業に基いた所謂分化社會に於ては、異なる職業團體の發達が必然に社會的團結を鞏固ならしめる『筈だ』と信じ、現代に於ける階級的不平等を以て病的現象なりとしてゐる。(Durkheim; *De la Div. du tr. soc.*, Livre III, ch. II-1a division du travail contrainte) ロッス氏は有機體論者を批難して彼等は『一定の生産的、分配的若しくは統制的活動に於て協力する諸個人によつて構成されたる機能

團體若しくは機關オカガシの上に停滯する』(Ross, op. cit., p. 273)と言つてゐるが、此の批難は確にデュルクムの弱點の一方面を指摘して當つてゐるものと思はれる。而して此の點に於て我々はデュルクムの理論がマルクス、ロリア、ワツカロ、ラツフエンホーフ、アー、グム、プロウイツツ、ノゾコウ等の社會の鬭争の方面に主として着目した所説によつて補はるべき多くのものをもつてゐる事を信じるのである。

要するに科學に於ては『善』といふ事はありえない。社會の結合の方面も反對の方面も、科學にとつては一切が事實として映じねばならぬ。一定の社會の結合が何によつて成立したか、又その反對が何に基いて生起したか、而して、それらの反對や結合が現實社會に於て如何に現れてゐるか、又如何なる働きをしてゐるかを唯ありのままに冷靜に考察する。そこには全く主觀的好惡の入る餘地はないのである。さればこれらのものは機能の研究として特別にとり出される必要はなく、すべて上來説き來つた如き社會過程の研究の中に没入され終る。(了)